

【研究発表会／A会場 午前】

『和泉式部日記』十一月記事に見られる古歌贈答の意味

國學院大學大学院生

副島 和泉

『和泉式部日記』終盤十一月に、帥宮と主人公が古歌をそのまま用いて贈答する場面がある。突如、帥宮が出家の可能性を仄めかし、宮邸に入る決意を固めつつあった主人公を落胆させる記事の直後に位置している。この二つの出来事には、何らかの因果関係を疑ってみてよいものと思われる。

ところで、その際に帥宮が贈ったのは、『古今集』の「あな恋し今も見てしか山がつの垣ほに咲ける大和撫子」という古歌であった。対して、主人公が選んだのは、『伊勢物語』七十一段の男の返歌「恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに」である。その後、数首のやり取りを経て、作品は宮邸入りへと突き進んでゆくが、この記事の頃の二人の関係性を考えてみると、和歌贈答の面白さなどではどうにも進展しえない段階に入っていたように思われる。歌のやり取りに明け暮れる日々中空しさを覚え、顔を常時突き合わせる関係を望むようになっていた二人であった。だからこそ、宮邸入りが唯一無二の方策として視野に入ってきたはずだったのでなかったのか。そうした

歌の無力さを痛感していた時期に、このようなたわいもない古歌の贈答が何の役に立ったのかと、素直に考えれば、奇妙に映る。

作品中、古歌がそのまま相互のやり取りに用いられるのは、この一例である。その希少性や、帥宮の選択した歌の大袈裟さ、主人公の「あなもの狂ほし」という感慨の珍しさは、従来も注意されてきた。けれども、その視点は作品展開に絡むところへは及んでいなかったように思われる。

本発表では、この古歌贈答場面を宮邸入り直前に据えられた最大級の記事として重視したい。その上で、不適當な喩えや過剰な表現とも見える古歌を贈った帥宮の胸中を明らかにし、そこに主人公が『伊勢物語』の歌を添えることによって、忘れかけようとされていた和歌の贈答の重い意味を、再発見してゆく経緯として押さえることを目指す。